の小麥とaハンドレッドエイッの鐵との中に存在するすること是れである。故に此兩者はそれ自體に於て小麥でもなく、又鐵でもない。或る第三者に等しいのである。隨つて此兩者の各個は交換價値たる限り此の第三者に約元し得られるものでなければならぬ。)

マルクスは更に語を繼いで曰ふ。

幾何學上の簡單なる例が此事實を明かにしやう。我々は總ての直線形の面積を決定し比較する爲にそれ等を三角形に分解する。そうして又、我々は此三角形それ自體を其目に見える形とは全く異れる言ひ表し、卽ち其高さと底との積の二分の一に約する。之と同樣に諸商品の諸々の交換價値も亦一つの(諸商品は其のより多くなり、より少くなりを表現する所の)共通物に約元することが出來る。[1]

と。而してこの共通物は如何なるものであるかと云ふに、決して商品の幾何學的、物理的、化學的乃至其他の自然的性質ではない。商品の實質的內容(アクチュアル・マテリアル)から自然的性質(使用價値)を捨象して殘るところの『勞働生產物としての性質』是れ卽ち共通物である。此の『勞働』にも指物師の勞働、大工の勞働、紡績工の勞働等と種々な形式はあるが、既に使用價値を捨象した貨物である以上、是等各種勞働の具體的形式も同時に消失したものである。茲に於いて勞働の形式は今や無差別となり、凡べてが相等しき人間勞働に歸へされて了ふ。斯くて最初の問題交換價値の特質如何が答へられる。曰く、交換價値は一般人間勞働の體現であつて、そは最早性質の觀

(1) Karl Marx: „Kapital." Bd. I 1364. S. 3.
* Karl Marx: Lohn, Preis und Profit にも同樣の文句あり。河上肇譯「勞賃價格および利潤」1924. pp. 67—63. 參照

念にあらずして量の觀念である。

(四)然らば交換價値の大小は如何にして計量さるゝか。

Durch d.s Quantum der inihm enthaltenem „werthbildenden Substanz,“ der Arbeit. Die Quantität der Arbeit misst selbst misst sich an ihrer Zeitdauer und die Arbeitszeit besitzt wieder ihren Maſsstab an bestimmten zeittheilen, wie Stunde, Tag u. s. w.[1]

即ち價値の大小は、價値構成材料即ち勞働の分量に依つて測られる。而して勞働量それ自體は勞働の繼續期間に依つて測られる。勞働の繼續期間は或る時の時期例へば時間、日數等に度盛りされるのである。

勞働量を價値尺度とすると云ふことに就いては、吟味すべき點が二三ある。第一、價値が勞働量に依つて定まるものとせば、人が怠惰であり、不熟練であり、遲鈍である程、生産物の價値は大となるか。第二、生産に用ゐられたる資本は價値計量に對して無關係なるか。第三、賃銀を以つて取引されつゝある勞働それ自體の價値は何に依つて定まるかと云ふことである。

〔第一〕マルクスは斯う答へてゐる。

價値の實體を形成する勞働とは、同樣なる人間勞働、同一なる人間勞働力の支出の謂である。商品界の諸價値の中に表現される、社會の總勞働力は、無數の個人的勞働力から成り立つてゐるが、茲では總て一樣なる人間勞働力と見做される。そして之等の個人的勞働力の各個はそれが社會的平均勞働力

(1) Karl Marx: „Kapital.“ Bd. I. S, 5.

たる性質を有し、又斯の如き社會的平均勞働力として作用し隨つて一商品の生産に於て單に平均的に必要なる、若しくは社會的に必要なる勞働時間のみを必要とする限り、いづれも皆同一なる人間勞働力である。そして其社會的に必要な勞働時間とは、現在の社會的、標準的生産諸條件と勞働の熟練及能率の社會的平均程度とを以て何等かの使用價値を表現するに要する勞働時間を指すのである。(1)」

〔第二〕こゝに勞働とは生産に際して、直接投ぜられたる勞働を指すのみならず、過去に於いて間接に投ぜられたる勞働をも包含する。卽ちマルクスは曰ふ。

商品の交換價値を計算するに當つては、吾々は最後に用ひられた勞働の分量に加ふるに、商品の原料の上に以前費された勞働の分量と、かゝる勞働を助くるための器具、道具、機械、および建物に賦與された勞働とを以てしなければならぬ。(2)

〔第三〕此の點は一部のマルクス批評家に依つて屢々非難の矢を向けらるゝところである。併し、この非難はマルクスが價値を說くに當つて、勞働と勞働力とを判然區別した點に顧みれば、その不當なることが容易に看取される。マルクスは『資本論』の中に「總ての勞働は、一方に於いては人間勞働力の生理學的意味での支出である。(3)」と云つた樣な、勞働と勞働力との使ひ別けを隨所にしてゐる。尙ほ又、彼れの「價値、價格及び利潤を見れば」勞働力なる項目の下に次の如く言つてゐる。

(1) Karl Marx: „Kapital“ Bd I. S. 5.

(2) Karl Marx: „Lohn, Preis und Profit.“
河上肇譯「マルクス勞賃、價格、および利潤」1924. p. 74.

(3) Karl Marx: „Kapital“ Bd I. S. 13.

勞働者が賣るところのものは直接彼れの勞働ではなくて勞働力なのだ、その勞働力の處分を一時彼は資本家に委ねるのだ。……英國の最も古い經濟學者でまた最も創始的な哲學者の一人――トマス・ホッブス――は既にその著 Laviathan において、直覺的に此の點に觸れてゐるが、それは彼れの後繼者によつて看過されて仕まつた。彼は曰ふ『人の價値または値打は、總ての他の物におけると同じく、彼れの價格、即ち彼れの力の使用に對して提供せらるゝ所のものである』(1) と。

マルクスに從へば勞働は賣ることの出來ないものである。隨つてそれは商品價値を有しない。商品として市場で賣買されるのは勞働力であつて勞働ではない。勞働は勞働力の費消の結果

(1) Karl Marx: „Lohn. Preis und Profit." 河上肇譯「勞賃、價格および利潤」192[illegible]. pp. 88—89.

であつて、この結果された勞働の量が價値構成要素となり、價値尺度となるのである。

されば價値構成要素としての勞働と勞働力その物とは全然別物であつて、混同すべきものではない。隨つて勞働の商品價値と云ふものはあり得ないが、勞働力の商品價値はあり得る。然らば何が勞働力の價値であるか。答へて曰く「勞働力の價値は、勞働力を生産し、發達せしめ、維持し、且つ永續せしむるに要するところの生活必需品の價値によつて定まる。(2) 即ち勞働者自身が生成し、其の生命を維持し、又勞働者の種を絶やさない爲めの子供を養育するに必要とせらるゝところの平均勞働時間に依つて決定される。

* * * * * *

(2) Karl Marx: „Lohn, Preis und Profit."
河上肇譯前掲書、pp. 93—94.

以上を以つてマルクス價値説の根底は大體明かになし得たと思ふが、併し、マルクスは更に『資本論』第二章第二節以下、商品に表はれたる二重性格を説き、價値形式を語り、第四節に於いて「商品の拜物的性質の神秘」に及んでゐる。是等は實はマルクス勞働價値説の眞髓で、以上述べ來つたところはこゝに至つて更に明快を極めてゐるものと思はれる。併し、上述したところを以つて其の所説は窺ひ得らるゝものであり、且つ餘り長くなるから一先づ省略する。

私は先きに勞働價値説はスミスに出でゝリカルド之れを繼承したものであるが、之れを完成したものはマルクスであることを述べた。何故と云ふに、リカルドが勞働價値説を採り乍ら結局生産費に降伏した點は兎もあれ、彼れが交換價値を説くに及んでやその勞働根源説は甚だ不徹底、マルクスの明快に及ばざること遙かに遠きが故である。

リカルドが、勞働が交換價値の構成素である所以を述ぶるの條に於いては唯單に、

Possessing utility, commodities derive their exchangeble value from two sources: from their scarcity, and from the quantity of labour required to obtain them.……These commodities, (註卽ち from scarcity) however, from a very small part of the mass of commodities daily exchanged in the market.(1)

(若しも効用を有するならば、諸貨物は、次の二つの根源から其

(1) David Ricardo: "The principles of Political Econorny." pp 5—6.

の交換價値を生ずる。卽ちそれ等の物の稀少性から、及びそれ等の物を取得するに要する勞働の分量から。……けれども之等の貨物は日々市場で交換取引さるゝ貨物の總量の極めて小なる部分を占めてゐる。

と云ふに止つてゐる。然るにマルクスは商品に表はれたる勞働に、二方面あることを指摘して利用勞働の何たるかを說き、更に等價物形式を說く條に於いて交換價値に於ける利用の重要を力說してゐる。

私は曩に「マルクスは交換價値を說くに際して利用性を看過した」と云ふ非難を辯護して「交換關係に於いては交換價値と使用價値とは相反撥するものである。交換價値が現はれる時には使用價値は其の影を潛め、使用價値が現はれる時は反對に交換價値が其の影を潛める」と云つて置いた。諸君が之を以つて「交換價値に於いては、利用は全然除去される」若くは「利用は必要條件であるが根柢をなすものでない」と解釋されるならば、そは大なる誤解である。若し左樣に解せらるゝとせば、私の言はマルクス辯護にあらずしてリカルド辯護になる。私が交換價値が現はれる時、使用價値が引込むと云つたのは、交換關係に於ける交換當事者の一方に就いての言である。例へば、茲に甲乙あり、甲は商品、米を提供して乙の商品、布と交換するとせよ。此の交換關係に於いて甲なる當事者のみに就いて考へれば、甲は米を商品として提供するのであるから甲に取つては米の使用價値は影を潛めて交換價値のみ現

はれる。更に、乙の方から見れば、米が乙に取つて使用價値ある。故に、布を提供して之れを得んと欲するのである。即ち米の使用價値は乙にあつて、甲にはなく、交換價値は甲にあつて乙にはない。同樣に布の使用價値は甲にあつて乙にはなく、其の交換價値は乙にあつて甲にはないのである。故に交換關係に於いて貨物の利用性即ち使用價値は全然除去されるどころか、なくてはならぬ要素である。マルクスの「勞働の二重性格」以下「價値形式乃ち交換價値」の各章を見れば明瞭である。

以上を以つてマルクスの勞働價値說の所論は一先づ筆を擱く。由來、難解を以つて知らるゝマルクスであるから未熟なる私の如きが、以つて十分理解し解說し得たと云ふ樣な潛越な考へは素より持たない。乍去、價値說に就いては通讀と思索を重ねたから、縱し誤解したとするも、マルクスの大綱を根底的に誤つてゐることはなからうと信ずる。

尙ほ旣述したマルクスの非難の外「價値が勞働に依つて決定されるならば、勞働の結果にあらざる土地が何故に價値を有ち得るか」とか、「等しき勞働の結果は等しき價値を生ずべき筈なるに、然らざるは何故か」と云ふ程度の論難は、私の周圍から、又立派な學者の著書から屢々耳にするところである。併しながら之等は總じてマルクスを誤解せるにあらざれば、理解の不足に出づるものではあるまいか。私はマルクスの論及する範圍に於いては彼れに理

論的缺陷あることを指摘し得ないものである。

今日、マルクス價値說は、殆んど棄てられて顧みられない樣である。實に今日の經濟價値論は限界効用說全盛である。併し私は思ふ。限界効用說に多大の眞理の包藏されるは否定の限りでない。けれども大なる缺陷あることも同時に承認しなければならない。

前にも述べた如く、勞働價値說はマルクスの完成するところであり、マルクス批評の一半は又玆に向けられたのであるが、その批評たるや殆んど誤解か、不理解の致すところであつて、理論的に彼れを難破し得たる者のあることは私、寡聞にして聞かないところである。

私は今日の學界が如何樣であれ、限界効用說以上に勞働價値說を信奉するものである。次節に於いて限界効用說を高唱する主觀的價値論者がどの程度まで徹底してゐるか、此の派先人の述ぶるところを辿つて見たいと思ふ。(1)

三　主觀的價値論(限界効用說)

(1)　主觀的價値論要旨

主觀的價値說とは、價値現象を專ら認識主體の心理的判斷に依つて發生するものとなす學說であつて、物の價値を効用性(利用性)と稀少性との二つに基礎付けんとするものである。故に此の學徒は價値の法則を立つるに當つて、先づ慾望より研究を進め、慾望

(1)　拙稿「經濟價値論の研究」日本法制新誌、第二十二卷第八號所載

を充足し得る財貨の利用にありと云ひ、其の利用の度合、換言すれば慾望の强弱の度を以つて價値と呼ぶのである。而してその利用の大小は財貨の存在高に支配さるゝが故に、結局價値は利用性と稀少性の二元に依つて決定すると說くのである。試に其の所說の一例に聞かんか。セリグマン經濟原論の一節に曰く、

貨物の供給量が漸次增加する時は、それに對する効用は漸次減少して、竟いに或る限界に達するものである。一定の貨物に對する欲望の强度は、單位量の增加に從つて減少するからである。之れを名付けて効用漸減の法則と云ふ。例へば或る飢えたる旅人が、一個の林檎を見付たりとせんに、此の一個の林檎は彼れの死活に關係するものであるから、その効用たる、蓋し絕大のものである。けれども林檎が更に二つ見付かり、三つ見付かり漸次增加したりとせんか、其の增加したる物に對する彼れの評價は、二つ目は一つ目より、三つ目は二つ目より、より小となるに違ひない。かくて十個の林檎を得るに至つて、彼は全く飽滿の極に達したりとせんか、それ以上の林檎は彼れに取つては或は不用の重荷となつて迷惑を感ずるかも知れぬ。此の十個目の林檎の効用、卽ち最後の增加された一單位の効用は彼れが林檎に對して認める効用の限界をなすもので、名付けて限界効用と云はるゝものである。

由是觀之、或る貨物の限界効用は或る一定の時に於ける欲望の量に依ること明かである。特定の欲望は量が增加するに從

つて稀薄になる。此の旅人が若し五個の林檎しか獲られなかつたならば、その五つ目の林檎の効用――此の場合の限界効用――は尚ほ著しきものに相違ない。それ故に限界効用の度合は、最後に充されたる欲望の強度に依つて決定さるべきである。

或る一定の時に於いて、個々の林檎の効用は、最後に增加された林檎の効用に等しい。――勿論、個々の林檎は質に於いても又量に於いても一樣であると考へる――それ故に、此の場合、見出された林檎全體の効用は最終單位の効用(限界効用)に單位數を乘じた積に依つて現はされる。之れが卽ち林檎の價値である。(セリグマンは次に全部効用と有効効用との區別を說いてゐるが、之れは後に屢々述べるところであるから省略する)。

こゝに於いて論者は曰く「物の價値は限界効用に依つて定まるものなり」[1]と。

限界効用說はその初め、獨逸のゴッセン(H. Gossen)に依つて唱へられ、ゴッセンの後、約二十年にして英國のゼボンス(S. Jevons)、墺太利のメンガー(C. menger)、瑞のワルラ(L. Warlus)に依つて、同時に三鼎足をなして唱道されたものである。而して前にも云つた樣に、之等の主張を承認する學者益々多きを加へ、價値論の根底は限界利用學派に依つて永久に確立せられたかの如き觀を呈するに到つた。墺國學派の反對者すら、價値論に對して、決定的影響を與へた限界利用學派の功績を無視することは出來ない。經濟學の理論が之れに依つて一新時代を劃したことは否定することの出來ぬ

(1) R. A. Seligman': "Principles of Economics" 5th edt. 1912. pp.175—177 (大意)

事實である。

(2) ゴッセン價値論

ゴッセンは(Hermann Heinrich Gossen. 1810—)一八五四年、其の著「人類交通の法則發達並に之れより生ずる人類行動の法則」Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fliessenden Regeln für menschliches Handln. に於いて、『第一、同一享樂の大さは其の快感の享受を絶えず繼續する時は漸次減少し、遂に飽和點に達す。第二、曾て得たる享樂を繰返す時は其の享樂の大さは同じく遞減す。而して繰返されたる享樂そのものが減ずるのみならず、之れを初むる時の享樂の大さも前より少し、又享樂を享樂として感ずる時間の長さも一回よりは二回、二回よりは三回に於いて短く飽和點の來ること早く反覆の速かなる程、其の享樂の大さも、續く時間も共に減ず[1]」。とて所謂効用遞減の法則を述べ、更に『多種の享樂が竝び存するも、時間之れを許さゞる時は、其の受くる享樂の量を最も大ならしめんが爲め、各種享樂を其の一部に止め、享樂を止めたる瞬間に於いて各部より受くる享樂の大さを均一ならしむる如くす[2]」。と時間と享樂との關係を述べて實生活に於ける欲望充足の規準を示し、進んで今日の所謂限界効用の本則を云つて曰く、『凡て一般に價値を有し得べきものも唯その中の一定量のみが價値を有し、是れ以上の增量は常に無價値なり、此の無價値點は量の增大と共に近づいて來るを以つて、最初の單位は最高の價値を有し

(1) H. H. Gossen: "Entwicklung der Gesetze des menschlichen Verkehrs, und der daraus fliessenden Regelu für menschiches Handeln.
(2) H. H. Gossen: ibid

新たに加はる各量は各々により少き價値を有し、終いに無價値に到着す。[1]』と。

以上、その所説の一斑に依ても窺ひ得るが如く、限界効用説に先鞭を着けたものは實にゴッセンその人であつた。然るにその所説は如何なる事情あつてか、深く學界に顧らるゝことなくして葬られ、後の三人者出づるに及んで、斯説は學界に大なる反響を惹起し、特にその價値説に於いて一新時代を劃せしむるに至つたのである。

「參考書」小泉信三「ヘルマン・ハインリッヒ・ゴッセンと其學説」三田學會雜誌第五卷第一號、同「主觀的價値論沿革の一節」三田學會雜誌第六卷第二號、Haney:—op, cit. pp 450—45?. 福田德三「經濟學講義」第四版、手塚義郎「ゴッセン研究」、

(1) 小泉信三、「日本經濟大辭書」叙述。B'K. III. pp. 1289—1290

(3) ジエウオンス價値説

ジェヴォンスは(W. S. Jevons. 1835—1881)一八七一年、名著「經濟學理論」(The Theory of political Econonmy 1871)を出して英國正統派經濟學の廣野に、スミス及びリカルドと竝んで巍然たる丘陵をなした。彼れの所説の中にあつて、殊に輝けるものは云ふ迄もなく限界効用説の提唱であつた。ジェヴォンスは其の著の第一頁に於いて先づ價値論に對する態度を闡明して『余は思索と研究を重ねたる末、竟いて價値は全然効用に基づくものであるとの新説(ノベルオピニオン)に到達した[2]』と。然らば効用とは何ぞと云ふに、『効用とは、我々の目的に役立つ物の抽象的性質[3]』である。而してその「我々に役立つ

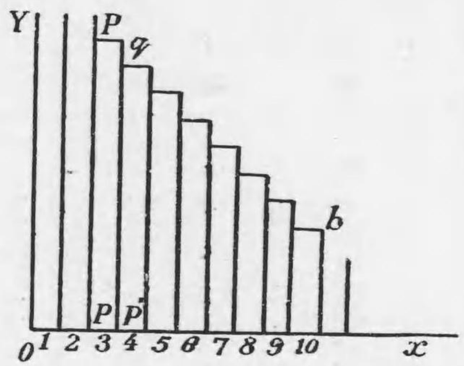
(2) W. S. Jevons: "Theory of Political Econorny." 4th edit. 1911. p. 1.
(3) Jevons: Op. cit. p 38.

と云ふことに對して頗る心理的解釋を下して曰く『快樂を生じ苦痛を防ぐことの出來るものは凡て効用を有し得るものである』[1]が『効用は物に固有の性質ではない。寧ろ人間の要求と物との關係から生ずる物の狀態であると云ふのが適當である』[2]と。更に此の効用に就いて、我々は一貨物から生ずる全部効用と其の貨物の個々の部分が與へる効用とを峻別するの必要を力説し、一つの貨物が漸增する時は其の增加量に對する効用は反對に漸減すべきことを述べてゐる。[3]

價値に關する見解は斯くの如く効用に關する見解も亦以上の如し。故にジェヴォンスに從へば、物の價値は必然、物に對する人の要求(尊重)の度合に依りて決定さるべきものである。

(1) ibid. p 38.
(2) ibid. p 43.
(3) ibid. pp. 45—49.

ジェヴォンは効用遞減の法則を右の如く圖解して曰く、



ox線は食物の量を示す。今ox線を十等分し、是等の等分線の上に各々矩形を作つて、各矩形の面積が、增加したる食物の利用を示すものとせよ。然る時は最後に增した量の効用は10の上に作られた矩形に相當し、其の効用は最小である。oに近づくに從つて各增量は漸次大なる矩形をなし、3の上に立つ矩形は最大で、2及び1なる增量の利用は無限大である。[4]

(4) W. S. Jevons: Op. cit. pp. 46—47.

限界効用說に從つて、右圖解の場合に、供給されたる食物の全量の價値を計算すれば、

(1) 食物の供給量……1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

(2) 限界効用……10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

(3) 全供給量の價値……10 18 24 28 30 30 28 24 18 10

(4) 同　公　式……Value1＋Value2＋Value3＝Value10×10

ジェヴォンスは更に『價値なる慣用語には三つの異る意味が混同されてゐることを指摘して、

(一) 使用價値(Value in use)＝全部効用(total utility)

(二) 尊　重(Esteem)　＝最終効用(final degree of utility)

(三) 購買力(Purchasing power)＝交換率(ratio of exchange)[1]

(1) W. S. Jevons: Op. cit. p 81.

なる三者は、截然區別すべき必要あることを述べた。

以上私の一瞥した彼れの所說は第二卽ち最終効用(限界効用)に關するものであるが、第三卽ち交換率の決定に關しても理論に變りはない。卽ち彼れは『交換理論』の劈頭に、

The ratio of exchange of any two commodities will be the reciprocal of the ratio of the final degrees of utility of the quantities of commodity available for consumption after the exchange is completed.[2]

(任意二貨物の交換率は交換がなされたる後の二貨物の最終効用の比に反比する)

と云ふ根本命題を示し、說明して曰ふ。

今、穀物のみを有する一交換團體と、牛肉のみを有する一交換

(2) Jevons: Op. cit. p 95.

團體ありと想像せよ。斯樣の場合、穀物の一部と牛肉の一部とを交換するならば、双方の利益を增すこと明かである。然らば我々は如何にして、如何なる點に於いて中止されれば交換は有利であり得るかを決定すべきか。此の問題は交換率と利用の程度如何に依つて定まる。今假りに兩者の交換率が穀物：牛肉＝10 ebs：1 ebs なりとせよ。若し穀物所有者にとつて穀物十封度が牛肉一封度よりも効用小なりとせば其の人は交換を繼續しやうと望むであらうし、又牛肉所有者にとつて牛肉一封度が穀物十封度よりも効用小なりと認むれば此の人はまた同じく交換繼續を望むであらう。斯くて交換は各當事者が出來得る限り利益を收め、此の上更に交換を繼續すれば却つて効用を失ふと云ふ點まで繼續され、兩者の滿足と平準の一致する點に於いて中止せらる。(1)

右で大體ジェヴォンス價値說の大要を窺ひ、從つて限界効用說の一斑に觸れて來たのであるが、限界効用說の明確なる提唱者としては彼れよりもメンガーの方が一般に認められてゐる。依つてワルラの所說は一先づ措いてメンガーの所說に聽かう。

(4) メンガー、價値說

カアル、メンガー(Carl Menger)は一八七一年、丁度ジェヴォンスと同年に「經濟學原論」を公刊した。その中で、

Din Bedeuting, welche konkrete Güter oder Güterquantitäten für uns da-

(1) Jevons: Op. cit. pp. 95—96.

durch erlangen, dass wir in der Befriedigung unserer Bedürfnisse von der Verfügung über dieselben abhängig gu sein uns bewusst sind.(1)

(價値とは我々の欲望滿足が懸つて或る一財の處分にあることを意識することに依つて我々が其の財に對して認め得る重要の度合である)

と定義し、從つて價値の本質より見れば、其の財が直接欲望滿足に供せられ得ると、交換に依つて間接に欲望滿足に供せられ得るとは論ずるの要なく、使用價値と云ひ、交換價値と云ふも畢竟一現象の兩面に過ぎないことを說いてゐる。

價値の出發點を欲望滿足に置くことジエヴオンスと符を一にする。彼れは更に、欲望滿足の程度に從つて直接欲望滿足に供せ

(1) C. Menger.: Grundsäze der Volkswirtschaftslehre 1871. S. 78

らるゝ財を第一級財 (Güter der ersten Ordnung)、第一級財の生產に用ゐらるゝもの、從つて間接に欲望滿足に供せらるゝものを第二級財と云ひ、以下之れに倣つて第三級財、第四級財と興味ある財の分類法を示してゐるが、之はこゝに詳述するの必要はない。限界効用說に對する彼れの提與は Grundsätze der Volkswirtschaftslehre に於ける次の一句である。

Der wert eines Korkreten Gutes oder einer bestimmten Teilquantität der einem wirtschaftenden Subjekte verfüglbaren Gesamlquantität eines Güts ist für dasselbe demnach der Bedeutung, welche die wenigst wichtigen von der durch die verfügbare Gesamt quantität noch gesicherten und mit einer solchen Teilquantität harbeizubührenden Bedürfnis-befriedigungen für das

obige Subjekt haben.[1]

（一經濟主體の利用し得べき或る一財の全量中、その一個若くは一定量の價値は、その全量に依つて保證されたる一定量の齎らす欲望滿足の內、その經濟主體に取つて最も緊要ならざるものゝ重要に等しい）

交換に於けるメンガーの所說は必然またジェヴォンスに一致するところであつて、卽ち交換の平準點は、交換當事者の與へんとする財の限界効用と、得んとする財の限界効用との一致點に外ならないとするのである。

(5) 限界効用說の缺陷

(1) C. Menger: "Grundsätze. SS. 107—8.

以上主觀派、限界効用說の創說者に就いて、其の所說を一瞥した。之等所說の一度、世に現はるゝや、價値論に一新時期を劃し、沼々學界を風靡して今日に及んでゐることは前述の如くであり、今日の學者が如何樣に斯說を取扱つてゐるかと云ふことは、之れ亦前述セリグマン所說に依つて略々察知される。（但、セリグマンは折衷派に屬すべき人で、限界効用說一點張りの人ではない）。

主觀派價値論者が斯樣に、人間の欲望その物より論を起して欲望を滿足せしむる効用性と、その効用の强度を決定する稀少性の二者を、融合不離のものとなし、効用遞減の理法に依つて使用價値を力說して、以つて交換價値に及ぶところ、寔に冒し難き心理的基礎と、井然たる敍述の形式を誇り得るものがある。乍然、吾等は同

時に又、幾多の缺陷と誤謬との斯說に包含さるゝの事實を看過することは出來ない。その二三に就いて述べて見やう。

(一)主觀的價値說が或る一物に價値ありと斷ずる爲めには効用と云ふ前提條件を必要とする。而してその効用とは物に對する心意の反映を意味する。ジェヴォンスの如くベンタム流の功利主義に終始し得るものはいざ知らず、吾等は欲望充足の快感や、物的享樂を供し得ることに依つて人生に効用あり價値ありと考へることは出來ない。

欲望充足行爲――之れが吾等の生活の目的でもなく、全部でもない。吾等の生活は道德生活實現(こゝに道德とは個人主義や國家至上主義の道德觀ではない)への過程であつて、吾等は此の生活高度の目標に近付くことを以つて快であり、幸福であるとする。從つて斯くの如き快を齎らし、斯くの如き幸福を寄與するものあるを以つて價値ありとする。這は總べての價値判斷に通貫する一脈の條理である。人の物質的滿足を充足し得るものが、効用あり價値あるものであると云ふことも、斯くの如き前提に立つてこそ、始めて意義あれ。功利主義の人生觀から價値判斷をなす者に取つては、この前提があり得やう筈もない。乍併、吾等は功利主義の人生觀、延いてはその價値觀を誤謬であるとは云はない。唯單に承認出來ぬと云ふのみである。

經濟行爲と云ひ、經濟現象と云ふも、道德完成への物質生活の基礎を充實せしめ得る點に於いてのみ意義がある。この前提なく

して、欲望滿足に供せらるゝものを以つて、直ちに價値ありとなすことは價値の第二義第三義に墮するものであつて、私は經濟學の水平線を斯く低下せしむることの可なる所以を知らぬ。

(二)ジェヴンスは『効用は物に固着の性質でなく、人の要求と物との關係から生ずる物の狀態である』と說く。果して然うか。人間を離れて効用のあり得ないことは勿論であるが、併し如何に人間が効用を認めようとしたところで、効用性のないものに勝手に効用を認めることは不可能の筈である。價値は主觀判斷であると云ふことは眞理であるが、主觀の判斷には常に客觀的對象を必要とする。その客觀的對象は單なる心理的產物ではない。價値を說くにジェヴオンスの如く心理的判斷を以つて終始することは贊し得ないところである。

(三)限界効用說は効用遞減則の上に立つてゐる。卽ち或る一定の時に於いて、或る一定の人に取つての物の効用は、その量の增加に逆比して漸次減少し、終いに零に到り、更に量が增大する時は却つて有害となり、不効用となると云ふ法則の上に立つ。此の法則には少くとも四つの不合理が考へられる。

(a)物の効用が量の增加と共に漸減すると云ふことは或る一定の時に於いては眞である。併し、或る人に取つての欲望は一度滿足されゝば永久再び起らない態のものではない。我々が一時に欲望を滿足せしめやうとすればこそ、其の効用に限界が生ずるのである。併し、その欲望の限界も効用の減少も極めて一時的のこ

とである。若し、其の貨物が保存し得らるれば、物量が如何に增加しても効用が減少すると云ふことはない。此の點に於いて、此の法則は誤謬ではないが、少くとも適用範圍の極めて狹小なものである。

(b)一定の時に於いて貨物の量が增せば、ジエヴオンスの所謂全部効用は增すけれども、限界効用は漸減する。此れは此の通りである。乍併、限界効用が減ずる爲めに全供給量の價値が隨つて減ずると云ふのは不合理である。彼等に從へば、貨物の增加量と限界効用、全部効用及び全供給量の價値との關係は次表の如くなる。

供給量	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
限界効用	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
全部効用	10	18	27	34	40	45	49	52	54	55	55
全供給量の價値	10	18	24	28	30	30	28	24	18	10	0

實例を以つて見んに、假りに市場に提供されたる鉛筆が一本、二本と漸次增加して十一本になつたとする。その場合、限界効用說に從へば、鉛筆が九本ならば人々は之れに十八錢を提供する。然し一本增加して十本になれば十八錢は愚か十錢しか提供しないことになるであらう。若し物量の增減と價値の增減とが反比例するものならば、九本に對して十八錢を吝まぬ人も十本に對しては十八錢を吝しむと云ふことになるに相違ない。これは合理なりや否や。更に見よ、我々は十本の鉛筆に對して十錢を提供することを拒まぬ。然るに唯一本增加して十一本となつたばかりに

一厘一毛すら出すことを肯んじないのは限界効用説當然の結論である。之れが果して眞なりや否やは云ふ迄もない。

(c)物の價値が數量の增加と共に漸減して竟いに零になると云ふことは「或る假想の特定なる人」に取つては眞である。併し、その特定の人が孤島に獨棲するロビンソンクルーソーならいざ知らず、社會生活を營める人である限り斯樣な事實はあり得べからざることである。

此の理は移して、社會に就いて見るも同樣である。例へば深川市場に米が增して、東京人の需要を充たして尙ほ餘剩ありとしたところが、米は下落するものではない。と云ふのは大阪もあれば函館もあるからである。米に對する限界は世界を一市場と見てその市場に於ける瞬間にのみ或はあり得ることかも知れぬ。

(d)物の効用は數量の增加と共に漸減して或る點に達すれば零となり、それ以上增加すれば有害となり、不効用となると云ふ。併し這は(b)に述べたる如く決して合理ではない。鉛筆の數が增して十一本になれば、その價値は或は零になる場合もあり得るであらうが、然し十二本となれば却つて有害となるであらうか。一二本は愚か、百千本になつたとて決して有害とはならない。

『水は或る程度までは、効用絶大である。或る量に於いては生命の支持者である。併し其の量が增せば洗濯にも使へば庭にも撒く。更に豪雨でもあつて水量が夥しく增加すれば効用は不効用となつて、人畜を傷ふに至る』[1]とは彼等の示す實例である。

(1) Jevons: Op. cit. p. 128.

成程、或る量の水は人畜の生命の糧となり、追々增量しては庭に撒いて惜しまれぬ樣にもなる。けれどもこの有用なる水と、豪雨のあつた場合の水とは全然性質を異にした水であることは注意しなければならぬ。豪雨の時の水は最初から不効用の水である。從つて効用は漸增もしなければ漸減もせぬ。初めから不効用のものに効用の增減はあり得ない。最初から不効用のものは、例令洪水にならぬまでも、一滴の時から既に不効用である、煤煙は不効用なものだ。それ故に煙が充滿して東京市中を包圍するまでに至らずとも、湯屋の煙突の丈けでも既に不効用である。

以上を以つて大體限界効用價値說の理論及び長短を述べた。而して斯くの如き價値說が今日、流風餘韻嬴然として經濟學界を掩ふの學說である。

四　經濟價値論の歸趣

(1)　歸趣は何處か

勞働價値說竝に限界効用說の意義を述べ、沿革を語り、更に批判を加へるに從つて私の意見も自らその中に述べた筈である。併し、これを以つて言、既に盡きたりとせんには餘りに不得要領である。由來、經濟的價値と經濟價値價値成立論と價値變動論、使用價値と交換價値、價値と價格、平準價格と市場價格、――是等の關係は截然區別して論ずべきものであつて、之等を混同する時は結局價値を說いて混亂に終始せしむるの外はない。世の價値論者の中

には、或は言葉の上には價値と價格を峻別し乍ら、說いて自ら之れを混同し、或は又價値變動論を以つて價値成立論を論駁するなど甚しき混亂を敢へてしてゐる向もないではない。依つて多少の重複は免れないかも知れぬが、こゝに以上諸概念の各關係を考察し、更に價値認識の問題に及びたいと思ふ。蓋し經濟價値論も一般美學上、倫理學上、論理上の價値と同樣に、畢竟認識論に外ならぬからである。紛々たる經濟價値說――その價値說の歸趣は何處か。本節の要旨がそれである。

(2) 經濟的價値と經濟價値

經濟的價値と經濟價値との區別は、言葉としては紛はしいものであり、亦如何はしいものでもあるが、事實は儼然區別さるべき性質のものである。

經濟的價値とは人類生活の理想に對して物質的基礎を寄與するものゝ謂である。例へば空氣の如き、水の如きはそれである。空氣は吾等の生命に取つて不可缺のものであるが、之れを獲得するに何等の犧牲を必要とせぬ。それ故に吾等は經濟行爲上、之れを價値としては取扱はぬ。經濟生活に於いて空氣を價値として取扱はぬからとて、空氣は依然として絕大なる價値である。何んとなれば人類生活の高度の理想へ達すべき重大なる物質的基礎を寄與するからである。之れを假りに經濟的價値と名付ける。

而して或る物――經濟的價値――を獲得する爲めに一定の犧

牲を必要とする時は、其の物を呼んで經濟價値ありとする。經濟價値なるものは勿論經濟的價値を荷ふものでなければならぬ。既に經濟的價値あり、之れを獲得するに一定の犧牲を要するならば、その物は初めて經濟價値である。故に空氣は經濟的價値はあるが、經濟價値はない。水は普通經濟價値のないものであるが、東京の如き大都市にあつては經濟價値を發生してゐる。

經濟學の研究の對象となるべきは、此の經濟價値の謂であることと、多言する迄もないことである。

(3) 價値の成立と變動

成立問題と變動問題とが、全然別物であることは、云ふ迄もないことである。例へば、時計の振子が左右に振れるのは何故かと云ふ問ひに對して「地球引力の作用に依る」と答ふるならば、そは振子振動の成因を說くものであつて、左右から振鐘の壓迫する力に依る」と答ふるならば、そは振子振動の變動を說くものである。價値の場合も之れと同樣で、需要大供給小ならば價値は大となり、反對ならば小となると說くが如きは價値變動の問題である。價値變動の說明は需給關係で判るが、之れのみでは價値の成立原因その物は不明である。價値論の困難は變動問題にあらずして成立問題である。吾等がこゝに取扱はんとする價値は價値成立論に限る。

(4) 使用價値と交換價値

使用價値と交換價値とは、アダム、スミスが其の著『富國論』の初頭に別用して以來、多くの價値論者に依つて採用さるゝところのものである。スミスの擧げた例に從へば、水は人生に取つて不可缺のもので、隨つて使用價値は絶大であるが、交換價値に至つては甚だ微小である。之れに反し、金剛石は吾等の生活に取つて不可缺のものではない。從つて使用價値は左迄大ではないが、交換價値に至つては極めて多大である。[1] スミス及び其の一派の學者に從へば効用あるものは凡て使用價値がある。換言すれば使用價値卽効用である。物が交換價値を有する爲めには先づ効用(使用價値)あることを前提としなければならぬが、更に獲得の困難(稀少を意味す)隨つて獲得に勞働を要すと云ふことを前提としなければならぬ。マルクスの云つた樣に、水、處女地などが使用價値のみあつて交換價値のない[2]と云ふ理由は、効用があつてもその効用は勞働を必要としなかつたからである。說いて玆に及べば、交換價値とは經濟價値の相に外ならぬ。從つて交換價値が吾等の經濟學研究上取扱ふべき價値である。

由來、使用價値は個人的のものであり、主觀的のものであつて、其の大小多寡は人に從つて各々相違するものである。飢えたる人に取つてはパン一片と雖も時に萬金に値するであらうが、然らざる人に取つては使用價値は殆んど零に近い。使用價値は個人的

(1) Adam Smith, "Wealth of nations" B'K. I. p. 30.

(2) Karl Marx. „Kapital" Bd. I. s. 7."

のものであるから孤島獨居のロビンソン、クルーソーにもあり得るが、交換價値はあり得ない。尤も河上博士の如く、交換價値を廣義に解して「交換價値……は交換の觀念を離れて成立ち得ざるものである。尤も玆に交換といふは廣き意味のもので……單に一人の人が居るに止る場合でも、人と人との間に於けると同じやうに、其人と其外界との間に所謂交換が行はれるのである。」[1]とするのではない。吾等は物に効用性あり、加ふるに獲得困難性あつてそこに經濟價値あり、更にその經濟價値が人と人との關係に置かれて初めて交換價値の相を呈すと觀ずるのである。されば交換價値が使用價値あつて初めて社會關係中に發生し得るものであることは勿論であるが、交換關係中にあつては兩者相反撥するものであることは前に、マルクス價値說の條に述べたが如くである。

(1) 河上肇、「經濟學研究」p. 19.

要するに使用價値は人と物との間に生ずる純主觀的のものであり、使用者夫々に依つて相異る、純個人的のものである。これに對し交換價値は人と人との關係あつて生ずる純社會的のものである。凡そ經濟學の研究對象は人と人との間に生ずる物質的關係である。從つて經濟學の研究範圍として取扱ふべき價値は、必然に交換價値でなければならぬ。

(5) 價値と價格

價値と價格も同樣に峻別すべきものである。福田博士兩者の

別を說いて曰ふ。

價値といふのは物の値打ちと云ふ事で、價格といふ方は物の値段といふ事であります。値段と値打とは違ひます。値段と値打は誰でも違ふといふ事には氣が附きますが、價値價格といふと混淆します。昔の思想に於て混淆したのは無理もありませんが今日でも價値と價格とは隨分混同して使つてをります。此二つは大變緣の近いものではありますが、さりとて決して全然同じものではありません。(1)

然らば兩者の關係如何と云ふに、セリグマンに從へば、

In civilized society we have become accustomed to measure all values in terms of a single commodity called money; so that by price we now

(1) 福田德三、「國民經濟學講話」乾、p. 372.

mean the money value of anything,—the amount of money for which it will exchange.(2)

(文明社會に於いて我々は凡ての價値を測るに貨幣と呼ばるゝ一貨物を用ふる樣になつた。それで價格と云ふのは或物の貨幣價値、卽ちそれに對して支拂はるゝ貨幣の額を意味するのである)。

更に詳說すれば、價格とは交換價値を貨幣の額で言ひ表はしたものである。卽ち福田博士の言葉を借りて云へば、交換に於ける物の値打を貨幣で見積つたものが物の値段である。更に嚴密に云へば、交換價値を貨幣で表はしたものが平準價格である。凡そ價格には二つの區別が可能であつて、一つはこゝに云ふ平準價格(ノルマルプライス)

(2) R. A. Seligman: "Principle of Economics." 1912. p. 148.

で、他は市場價格（マーケットプライス）と名付けらるゝものである。市場價格とは普通に價格と呼ばれてゐるもので、之れは需給關係に從つて騰落常なきものである。騰落常なきに拘らず其の間自ら一つの標準點若くは中心點なるものが考へられる。それが卽ち平準價格である。時計の振子を例に採れば、その左右に動いてゐる場合、振錘のとる時々刻々の點が市場價格に相當し、その標準基點卽ち重力の作用する方向の一點が平準價格に相當する。故に市場價格は決して交換價値その物の貨幣表現に一致すべきものではなく、平準價格は常に交換價値を貨幣に表示したものに相當すると考へ得るのである。

以上、述べたるところを再び要約すれば、こゝに吾等の研究すべき經濟純理上の價値とは(一)私の所謂經濟價値にして、そが社會關係に現はれて交換價値と呼ばるゝものであり(二)價値變動にあらずして成立如何の根本問題であり、而して(三)經濟價値(交換價値體)を貨幣で言ひ表はしたものを以つて價格(平準價格)なりとするものである。

(6)　經濟價値と認識論

倫理上の價値なると、美學上の價値なると、論理上の價値なると將た亦我が經濟價値なるとを問はず、價値とは、モト主觀的判斷である。けれどもその主觀と云ふ意味は『價値は主觀的のものである。それ故に價値は勞働力の消費と云ふ如き、客觀的條件に依つて定まるにあらずして、人間の欲望を滿足せしむべき程度に依

つて定まる。』と云ふが如き心理的な意味ではない。從つて斯樣な素朴なる思想を以つて直ちに主觀派限界効用說を是とし、客觀派勞働說を非とするは決して當を得たるものではない。假令、一歩を讓つて、効用說論者の心理的判斷を「主觀的判斷に依つて價値を決定するものなり」となし、其の所說を公正に承認したところで未だ之れを以つて直ちに勞働價値說を非とするの根據とはなり得ない。何となれば勞働說論者と雖も、心理的判斷に依る効用性を否定するものでなく、唯經濟價値を使用價値の派生としてのみ取扱ふことを否定するに過ぎぬからである。

主觀的判斷とは、効用說論者の云ふ如く、單に効用があるとか、ないとか云ふ心理的判斷にあらずして、主觀の認識を意味するのである。こゝに主觀とは先天的自我(經濟學の論理的基礎參照)の謂であつて、認識とは先天的自我の要求に依つて「かくあらざるを得ず」(Sollen)となすことの謂である。されば認識とは單に意識するとか、知覺すると云ふ如き心理的のものではなく、論理的必然の要求に基くところの主觀の思惟でなければならぬ。例へば我々が一つの動物を見て「之れは馬なり」と云ふ判斷を下すのは單に動物を知覺することに依つて生ずるのではない。このことをモット詳論すれば斯うである。

普通科學者は認識する主體と、認識せられる客體とを既存の實在として、そこから論を立てゝ行くのであるが、それは或る途中から進行することに外ならぬ。その途中までの過程を回顧すれば

辿つて來た道は迂餘曲折を極めて横はつてゐるのである。客觀的實在卽ち認識客體と云ふも、それは幾多の範疇に依つて構成された結果であつて、直接與へられたものは馬であるとも、何であるとも言へぬ。否、動物であるとさへ云へぬ筈である。「之れは馬なり」と云ふ知識も、幾多の階段を經て客觀的實在に達し、更に純我の認識に依つて初めて成立するのである。これ丈けの敍述では說いて尙ほ甚だ不充分であるが、こゝには直接の問題でもなく且つ前揭經濟學の論理的基礎」に於いて略々理解され得たと思ふから、唯結論だけを擧げるに止める。卽ち價値はモト主觀的判斷である。主觀的判斷は先天的自我の論理的要求に依る認識に外ならぬ」と。之は凡べての價値を通ずる條理であつて、經濟價値亦その一例に洩れぬ。

(7) 經濟價値認識の論理的要求

然らば經濟價値認識の上に於いて、斯くの如き論理的要求とは何であるか。之れを究明して行けば勢ひ經濟哲學の難問題に踏入る譯であるが、それは「經濟學の論理的基礎」に述べた如く、私に取つては未明の行路である。唯經濟學を一個の經驗科學として之れを取扱ふなれば、經濟價値の認識を促す必然的要求は、其の物の獲得困難と云ふことに基因する。言を換へれば、物の稀少性と云ふこと、從つてその物の獲得に勞働を要すると云ふことである。水や空氣の如きものは、經濟價値はない。その故に獲得困難と云ふ

必然的要求を認識主觀に與へないからである。若し水をして東京の如き大都會にあらしむるならば、認識主觀に要求して、經濟價値として認識せしむるに到るのである。

(8) 價値創造と勞働

こゝに於いてか、勞働は經濟價値の絶對的源泉ではないが、經濟價値は勞働を俟つて創造(實現)され得るものである。例へば地中の鑛石は發掘と云ふ勞働を俟つて初めて經濟價値を實現する。發掘された鑛石は更に加工されて器具となり、裝飾となり、更により大なる若くは性質の異なる經濟價値を實現するのである。勞働は遊戯の如く『其のこと自らの爲め』ではなく、『他の目的を達する手段としてするの力作の謂』[1]である。即ち勞働は、或る目的を豫想する目的行爲である。例へば山林の樹木は木材となさんが爲めに伐採され、木材は家となさんが爲めに板として、柱として加工され、家は人間が住居して、其の身體を保護せんが爲めに造られる。人間の生存維持、全べての勞働は先づ之れを目的として起る對外的目的行爲である。乍併、屢々繰返す如く、物質的生活はより高き目的への過程である。從つてこゝに例示する勞働も單に家を造つて、その中に享樂せんことのみを目的とするにあらずより高き究竟の目的を豫想し、それに到達せんが爲めの物質的價値の創造を目的とするに外ならない。此の如き見解に立つ時經濟價値は、倫理上の價値若くは美學上の價値と共に一脈相通の根

(1) 福田德三、「勞働經濟講話」p.791.

基を有するものと見ることが出來る。

(9) 勞働と社會的正義

『ジエボンスと云ふ英國の經濟學者は、勞働とはPainful exertion（苦しい力作）の謂であると申しました。誠によく要領を云ひ盡したもので[1]』はあるが、去りとて勞働は常に苦しき力作のみであらうか。ベルトランド・ラッセルは、眞の喜びは所有することの喜びではなくして、創造することの喜びであると云つたと聞いてゐる。勞働がより高き向上への物質的基礎を充實する創造的力作であるならば、そこには肉體上の苦痛以外、眞の喜びが存在し得べき筈である。他人の享樂の爲めに、奴隷的境遇に沈淪する今日の所謂

(1) 福田德三、「勞働經濟講話」pp. 783—784.

勞働者には、勞働は苦しき力作であるに相違ないが、さればとて、それは勞働その物の特質ではない。社會制度の犠牲である。因みに云ふ。人類社會は人類究境の目的への方便である。從つてその存在理由は「相互扶助精神の體現たる點にある。この見地より全べての個人は社會に對して、人類共通の事業に參加するの權利を有し、同時にその社會生活に寄與すべき何等かの義務を負ふものである。吾等が「社會的平等」と云ひ「社會的正義」と云ふは、各人均しく斯くの如き權利を有し、又斯くの如き義務を負ひ得ると云ふ謂に他ならぬ。之れを經濟上より云へば生存權、勞働權が卽ち是である。『我をして先づ生あらしめよ』の叫び、『汝の額に汗して汝のパンを喰へ』の聲は、人類社會のあらん限り永遠に繰返さる

べき題名（モット）であらう。

理論經濟學の若干問題 終

正誤

頁	行	誤	正
目次 六	一	理想主義倫論の長短	理想主義倫理の長短
七	九	主觀的價値論要	主觀的價値要旨
本文 一四	二	本論の定めんとする	本論の究めんとする
二三	註(4)	同上「同上」pp.43	同上「同上」p. 43
四四	一〇	規範に依て「2與へられたるものを個々の狀態に於て措定する形式である。……科學はその實在を或立場から更に組立つることにて「1經驗的內容を構成する所に生ずるのである。……所與性の範疇とは斯の如き直接に	規範に依て「1經驗的內容を構成する所に生ずるものである。……所與性の範疇とは斯くの如く直接に「2與へられたるものを個々の狀態に於て措定する形式である。……科學はその實在を或立場から更に組立つることに「3依て成立する。
四六	七	「3依て成立する	左右田博士に依れば
四八	七	左右田博士に依へば	廣漠たる學海
五一	八	廣弟るた學海	受けた印象の感情價値と
五八	三	受けた印象を感情價値と	感情的動機に驅られ
六五	七	感情的動機に駈られ	反射運動は……點である(1)。
七一	八	反射運動は……點である。	自己を滅し他の破滅
七七	六	自己を滅し、也を破滅	道德思想
八四	四	道法思想	

八五	一〇	不變の道法……可變の道法	不變の消德……可變の消德
八七	五	カンチズム……ダーウキニズム	カンチズム(1)……ダーウキニズム(2)
八九	一一	快樂にし	快樂にも
一〇二	五	人間全體	人間全體
一二二	一〇、一一	幼稚なる時代によつては	幼稚なる時代にあつては
一三八	一	た	た(1)
一五八	六	定ない	定まらない
一六五	註(1)	Ricardo: Op. cit. p.p. 11—12	Ricardo: Op. cit. pp. 11—12
一七一	註(3)	福田德三「勞働經濟講話」pp. 697—988	福田德三「勞働經濟講話」pp. 967—968
一七四	註(2)	Karl Marx: "Kapital" Pal. 1864 S. 6	Karl Marx: "Kapital" Bd. I. 1864 S. 6
一七七	一	消費者との間に	消費者との間に
一七九	註(1)	Karl marx	Karl Marx.
一七九	註(2)	Karl marx: Yur Kritik	Karl Marx: Zur Kritik
一八六	一一	約する	約元する
一八七	註(1)	Karl Marx: „Kapital" Bd. I. 1864	Karl Marx: „Kapital," I dI. 1864
二〇六	九	享樂の大さも前より少し	享樂の大さも前より少なし
二三四	註(1)	Adam Smith. "Wealth of nations"	Adam Smith, "Wealth of Nations"
二四八	一一	汝の〻を喰へ	汝の〻パンを喰へ

大正十四年九月廿四日印刷
大正十四年九月廿八日發行

理論經濟學の若干問題
定價金壹圓八拾錢也

著者　川西正鑑

發行者　東京市神田區錦町一丁目拾九番地　岩田岩吉

印刷者　東京市麹町區紀尾井町三番地　濱野英太郎

東京印刷株式會社麹町出張所

不許複製

發行所　東京市神田區錦町一ノ一九　文修堂書店　振替東京五八七八二

近刊豫告

谷口彌五郎著

一經濟學徒の斷想

四六版函入美裝 約四百五十頁余

定價未定

日本大學教授 圓谷弘著

社會學徒の描く世界

四六版函入美裝 三百五十頁余

定價貳圓也 送料十二錢

日本大學講師 井關孝雄譯 パッテン博士原著

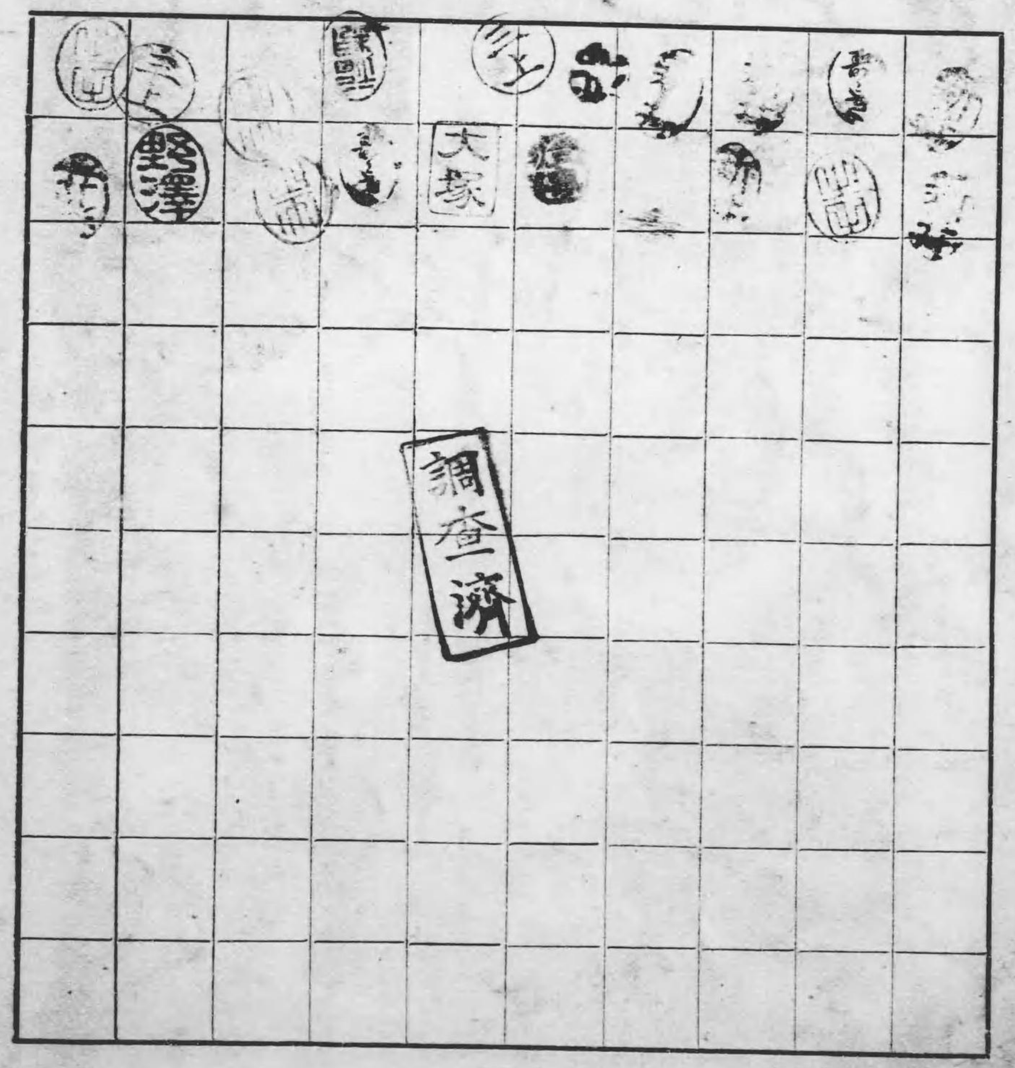
動態經濟學

四六版函入美裝 五百七十頁余

定價未定

546
13

15年1月22日



終